

## 「天皇のパラオ慰霊訪問」

2015年04月13日

人は皆、自分の生きてきた過去を「良かった」と是認しなければ、立つことができない。私は牧師として、多くの死に逝く人とお別れをしてきた。死の床で、自分の過去を「頑張った。良く生きてきた」と認めてくれる言葉を聞いて、人は深く安堵し死を受容することができる。私は「頑張った。良く生きてきた」と語りかけてきた。本当にそう思うからである。人の死はどんな死であれ、残された者に強いメッセージを残す。これを受け止めるのが残された者の責任である。

南京虐殺、従軍慰安婦、集団強制死などはなかったと言い張る歴史修正主義者がいまだにいる。理解できなくはない。自分たちの過去は「良い過去で、間違ったことはしていない」と考えなければ、自分たちが立ちゆかないと思っているからである。「歴史は現在が作る」という言葉もあり、過去はいかようにも現在から解釈できる。しかし、過去を正しく見なければ、理不尽な苦難を負わせられ、無残に殺されていった人々の後世に残したいメッセージはかき消されてしまう。これは、責任を回避することで、現在をも見誤る。

天皇・皇后のパラオ慰霊訪問が連日、新聞、テレビでトップ記事として大々的に報道された。日本軍の飛行場があったパラオのペリリュー島では、1944年9月、米軍の進撃を受け、激戦となった。日本軍守備隊は玉砕が禁じられ、塹壕や洞窟に身を隠し、2ヶ月半のゲリラ戦を戦った。日本兵は1万6千人、米軍は2千人が戦死したと言われている。生き残った日本兵はわずか34人で、地獄の戦場であった。

天皇は、この地の慰霊に行くことが長年の願いであったそうで、ようやく実現した訳である。天皇は、過去の戦争について「決して忘れてはならないと思います」と語り、平和への篤い思いがあることを理解できる。また、日本兵だけでなく、米兵双方への慰霊もしたと伝えられている。安倍政権は過去の戦争で間違ったことはしていないと言い、これから戦争のできる国にしようとする目論みでいる。そのためには、憲法改定が必要だと主張している。天皇は憲法99条で規定されているように「憲法尊重擁護義務」を負っている。そして、憲法擁護の発言をしばしばしている。安倍政権の目論みに歯止めをかける意図があるのではないかと憶測してしまう。また、靖国神社は国と天皇のために死んだ人々を祀っているのに対し、沖縄平和祈念公園の「礎」には沖縄戦戦没者名が国籍、軍人、民間人の区別なく刻まれている。天皇の全ての人々への慰霊は世界平和への思いがあると受け止められる。天皇のパラオ慰霊訪問は有意義で、美しく見える。

しかし、私には大きな疑問が残る。なぜ、戦争が起こったのか、誰が戦争を起こしたのか、誰の名によって戦争が進められたのか、なぜ、パラオに送られた兵士は砲弾を浴び肉片を散らしたのか、なぜ、病氣と飢えで死ななければならなかったのか。これらの「なぜ」を真摯にまず問うことである。また、兵士たちが死の真実で声にしたいメッセージは「自分たちのような戦死者を出してくれるな」に間違いはない。このメッセージを謙虚に受け止めることが真の慰霊ではないか。今を生きている者の責任ではないか。

天皇の慰霊訪問に感謝、感激していると、自分の歩む道を見失う。「思し召し」に納得することなく、主権を持つ国民が戦死者のメッセージを受け止め、慰霊する時、戦死者が生きかえる。彼らが経験した悲惨を再び起こさないという意味において、彼らの死が生に変えられる。天皇のパラオ慰霊訪問の異常な報道を見て、国民の主権が吹っ飛んでしまっている恐怖を感じたのは、私だけではないだろう。